

高校教育の題材としての 孤児院ボランティアツアーの可能性

目黒 紀夫

Potential of Orphanage Volunteer Tours as a Subject for High School Education

Toshio MEGURO

As volunteer tourism has spread among young people around the world in recent years, orphanage volunteer tours have been its particularly popular example. The volunteer tourism is pointed out as having the potential for high educational benefits, but the orphanage volunteer tours have been criticized from a variety of perspectives. This paper provides the basic features of the volunteer tourism and orphanage volunteer tours as well as the main criticisms of these tours such as tourists' selfish motives. It is clarified the orphanage volunteer tours are available as online ones and in the name of training in today's Japan. From the writings of Japanese high school students who participated in the orphanage tours, it can be seen that they have learnt various things and have begun to think deeply about their own future and career paths. In this respect, the orphanage volunteer tours appear to have the expected educational effects. However, it is only the personal usefulness for the high school students that is placed at the center of the tour, and not altruism, one of the principles of volunteering. In this respect, the orphanage volunteer tours are contrary to the goals of civic education in today's high school education.

- | | |
|---|---|
| <p>I. はじめに：教育効果の高い修学旅行としてのボランティアツーリズムの可能性</p> <p>II. ボランティアツーリズムとしての孤児院ボランティアツアー</p> <p>1. ボランティアツーリズムとは？</p> <p>2. 孤児院ボランティアツアーの内容</p> <p>III. 孤児院ボランティアツアーに対する批判</p> <p>1. イギリスの新聞記事における6つの論点</p> <p>2. 日本人大学生が参加する孤児院ボランティアツアーから見える問題点</p> | <p>IV. 高校生向けの孤児院ボランティアツアーの検討</p> <p>1. 高校生向けの孤児院ボランティアツアーの広がり</p> <p>2. ボランティアツーリズムの「研修」化</p> <p>V. おわりに：孤児院ボランティアツアーを通じた学習の可能性</p> |
|---|---|

I. はじめに：教育効果の高い修学旅行としてのボランティアツーリズムの可能性

今日、日本政府が高等教育のグローバル化を課題として掲げる中では、高等教育への足がかりとなる高校段階における国際交流が重要な施策として位置付けられている（文部科学省 2022:3）。グローバル人材育成を目指すカリキュラムである「国際理解教育」に取り組む高校が増える中では、

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が世界的に流行する2019年度まで海外修学旅行の実施校数も参加生徒数も増加傾向にあった（全国修学旅行研究協会 2020:2）。2020年度・2021年度に海外修学旅行を実施した高校数は0だが、2022年5月1日の時点で276校（生徒数43,390人）が同年度中の海外修学旅行を予定しており、その数は2018年度（実施校962校、参加生徒数16,881人）の3割弱に達する（全国修学旅行研究協会 2022:83-84）。

箱石 (1996:28) は、「修学旅行をとおして、ひとは〈非日常的な世界〉〈異文化の世界〉への眼が開かれる。そして修学旅行を契機として、ひとは自分をよく見つめ、自分の生活をよく考えることができる。これは修学旅行の大きな教育上の意味といえる」と述べ、修学旅行の社会科 (公民科) 教育としての重要性を指摘する。ここで、国内修学旅行と海外修学旅行を比較すると、より非日常や異文化の度合いが高い後者の方が学生の学びや成長に繋がる可能性が高い (宮川・小口 2020:74)。また、今日の社会や人間性についてより深く学ぶ機会となり得るものとして、ボランティア体験が挙げられる (箱石 1996:26-27)。そうした時、1990 年代以降、開発途上国を始めとする海外におけるボランティア活動を中心とする旅行すなわち「ボランティアツーリズム」が世界の若年層の間で広がり、日本でも大学生を中心に人気を集めるようになっており (薬師寺 2016a)、最近では高校生向けのボランティアツアーが用意されるようになっている。

修学旅行に関して企業や地域に依存する学校も少なくないと言われる時 (宍戸 2011)、既に多数のパッケージツアーが商品化され数多くの若年層が参加してきたボランティアツーリズムが、修学旅行として参考にされる可能性が全くないとは言いきれないだろう。しかし、その一方で、孤児院におけるボランティア活動を目的とするボランティアツアー (孤児院ボランティアツアー) が人気を集めてきた時、それに対する批判が様々な観点から提起されてもきた。

本稿の目的は、修学旅行として高い教育効果の可能性が指摘されているボランティアツーリズムの実情を整理することである。具体的には、ボランティアツーリズムの概要を説明した上で、その代表例である孤児院ボランティアツアーの内容とそれに対する批判の要点を整理する。そして、最近の日本における高校生を対象とした孤児院ボランティアツアーの特徴を明らかにしつつ、既存の批判に照らしてその教育効果を検討する。

II. ボランティアツーリズムとしての孤児院ボランティアツアー

1. ボランティアツーリズムとは？

ボランティアツーリズム (volunteer tourism)

はボランツーリズム (voluntourism) とも呼ばれ、それを実践する人はボランティアツーリストやボランツーリストと呼ばれる。大橋 (2012:9-10) によれば、ボランティアツーリストとは「ツーリストであって、ツーリズムの過程で何らかのボランティア活動を行う者たち」である。ボランティア活動としては、教育支援や児童・高齢者・疾病者などの支援、自然保護・環境保全の活動、建設作業や施設整備などがあり、活動に従事する期間は数日から数週間が一般的だがより長期の場合もある。そのため、「多様性が何よりも特徴とっていいものである」 (大橋 2012:10) とされる。なお、先行研究においてボランティアツーリズムという場合、それは基本的に海外旅行・国際観光として行われるものであり、アジア・アフリカの開発途上国を主な目的地としている (薬師寺 2016b)。

ボランティアツーリズムが本格的に展開されるようになったのは、1990 年代以降である (薬師寺 2016a, 2016b)。この時期、それまでの主流であったマスツーリズムが大量生産・大量消費を前提とする時、観光開発が環境破壊や文化破壊、地域社会の抑圧、地域資源の搾取など様々な問題を生み出していることへの批判が高まった (薬師寺 2016a:59)。それに対して、観光開発を前提としない小規模の観光で、地域社会への負担や悪影響の予防・削減を目指す数々の取り組みが生まれ、「オルタナティブ・ツーリズム (新しい観光/もう一つの観光)」と総称されるようになった (薬師寺 2016a:59,72)。ボランティアツーリズムはオルタナティブ・ツーリズムの 1 つと位置付けられるものであり、まず 1990 年代に西ヨーロッパ先進諸国の若年層を中心に広まり、21 世紀に入り日本や新興諸国でも人気を集めるようになった (薬師寺 2016b:200)。

ボランティアツーリズムへの参加方法は国や地域によって傾向が異なる (薬師寺 2016b:200-201)。欧米の若年層では、バックパック旅行の道中の 1 つの活動として旅先で実践することが多い。アジア諸国の人びとであれば、NGO や企業、大学サークルなどの団体の一員としての参加者が多い。日本人の場合、旅行代理店や NGO が募集するパッケージ型のツアーに参加する割合が高い。2010 年代の日本においては、H.I.S. (ブラン

ド名「H.I.S. スタディツアー」と地球の歩き方T&E（ブランド名「地球の歩き方海外ボランティア」）が大手の催行業者であった（薬師寺 2016b:200）。人気が高かったのは東南アジアへのツアーであり5～10日の日程で費用は10～15万円程度、ボランティア活動の対象は孤児院や小学校にいる子どもが多くを占めていた（薬師寺 2016b:200）¹。

2. 孤児院ボランティアツアーの内容

ボランティアツーリズムとして世界的に人気を集めてきたのは、孤児院を訪れてそこに暮らす孤児に対して何かしらの活動を行う孤児院ボランティアツアーである（薬師寺 2016a）。本節では日本において主流であるパッケージ型ツアーの内容を紹介する。

2023年9月15日時点で「H.I.S. スタディツアー」のウェブサイトでは、「ボランティア・国際協力」を目的とするツアーとして参加者が募集されているものが11件あった。ツアー名と活動内容にほぼ変わりがなく、出発期間や日数、費用、「ボランティア・国際協力」とは言い難いアクティビティ（世界遺産の観光や自由行動など）の内容だけが異なるものを同一ツアーと見なすと、ツアー数は8つとなる。このうち半数に当たる4つが孤児院

における活動を主目的とするツアーであり、その概要は表1の通りである。その他の4つのツアーは、学校（うち2つが日本語学校）における活動を主目的とするものが3つ、スラムの子どもを活動対象とするものが1つである²。つまり、「H.I.S. スタディツアー」のボランティアツアーは全てが子どもを対象としており、そのうちの半数が孤児院ボランティアツアーということになる。

「ボランティア・国際協力」を目的とするツアーと言っても、実際にボランティア活動に従事する時間は限られている。初日や最終日は移動だけで終わることが多い上に、いずれのツアーも観光の時間を多く設定しているため、孤児院においてボランティア活動に従事する時間の合計は、短いツアーでは5時間、長いツアーでも11時間未満である。どのツアーもボランティアに関する知識や技術、資格、経験などを参加者には求めていないことが、それぞれのウェブページで明記されている。「何か特別な資格や技能は必要ありません」（世界最大規模の孤児院に訪問 孤児院交流&アユタヤ遺跡観光タイ・バンコク）というだけでなく、中には「言葉がしゃべれなくても大丈夫！中には英語が喋れる子どももあり、現地ガイドが皆さんをサポートしてくれます」（NPO 法人

表1 「H.I.S. スタディツアー」の孤児院ボランティアツアーの概要

ツアー名	NPO 法人「SALASUSU」訪問 孤児院交流&アンコールワット カンボジア	世界最大規模の孤児院に訪問 孤児院交流&アユタヤ遺跡観光タイ・バンコク	子どもたちと交流し、子どもたちから学ぶ ベトナム・ホーチミン	人道支援の本場で「生きることを考える インド・マザーテレサ施設ボランティア
渡航先（都市）	カンボジア（シェムリアップ）	タイ（バンコク）	ベトナム（ホーチミン）	インド（デリー、コルカタ）
日数	5・6日	4・5日	4日	7日
費用（円）	175,000～339,000	109,800～314,000	124,000～238,000	268,000～368,000
備考	<ul style="list-style-type: none"> ・孤児院でボランティア活動を行うのは2日間で合計8時間（子どもたちとの昼食の時間も含む） ・ボランティア活動の振り返り・準備の時間として2時間が設定 ・ボランティア活動の例として書かれているのは、日本語や日本文化、音楽、体育、工作を教えること 	<ul style="list-style-type: none"> ・孤児院でボランティア活動を行うのは3日目の10時～15時のみ ・ボランティア活動の例として書かれているのは、日本語や日本の歌・踊り、折り紙や図画工作、サッカーなどのスポーツを通じた交流 	<ul style="list-style-type: none"> ・孤児院でボランティア活動を行うのは2日目の10時～15時のみ ・ボランティア活動の説明として書かれているのは、「時間の許す限り、たくさん遊んであげましょう!!」、「孤児院のスタッフの指示のもと、お皿洗いや掃除、その他学校に行っていない子どもたちのサポートなど、色々なこと」など 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動を行うのは2日間で最長でも11時間（4日目の午前（8～12時）・午後（～15時）と5日目の午前（8～12時）） ・ボランティア活動の説明に半日（3日目の午後）が割り当て ・ボランティア活動の例として書かれているのは、大量の洗濯、掃除、食事のサポート、排せつ・着替えのサポート、大量の食器洗いなど

「SALASUSU」訪問 孤児院交流&アンコールワット カンボジア)といった形で、外国語によるコミュニケーション能力も不要としているツアーもある。その一方で、いずれのツアーの参加者にも終了時には「ボランティア参加証明書」が授与されることになっている。

Ⅲ. 孤児院ボランティアツアーに対する批判

1. イギリスの新聞記事における6つの論点

薬師寺 (2017a) は、ボランティアツーリズムの歴史が長いイギリスの主要新聞社の孤児院ボランティアツーリズムに関する38の記事を分析している。その結果、「大多数が先進国からの観光者が開発途上国の孤児院でボランティアを行うことに対して、批判的に捉えていることが理解できる (薬師寺 2017a:62)」と述べている。

38の記事の中には、「ボランティアツーリズムは自分の人生をどのように変えたのか (How voluntourism changed my life)」、「学生の声：ボランティア休暇は開発途上国開発の強力な手段となる (Student Speak: Volunteer holidays can be a powerful tool for development)」といった孤児院ボランティアツアーを擁護する内容のものもある (薬師寺 2017a:63-65)。しかし、より多いのは「ボランティア活動はウガンダの孤児の数を増加させる要因となっている。ボランティア活動は中止される必要がある (Volunteer are fueling the growth of orphanages in Uganda. They need to stop)」、「国外で教えること：ボランティアは子供にほとんど教育的な利益はもたらさない (Teaching abroad: “Volunteers had little educational benefits to the kids”）」といった批判的な記事や、「孤児院観光：援助かそれとも妨害か? (Orphanage tourism: help or hindrance?)」といった負の側面を示唆する記事である (薬師寺 2017a:63-65)。それ以外に、「国外でボランティアをする前に自問自答すべき7つの質問 (Seven questions you should ask before you volunteer abroad)」のように孤児院ボランティアへの参加を一概には否定せず、注意や再考を促す記事も散見される (薬師寺, 2017a:63-65)。

こうした記事に基づき、薬師寺 (2017a:65-71) は孤児院ボランティアツーリズムが抱える矛盾とそれに対する批判を6つに整理している (表2参

照)。つまり、ボランティアの原則として自発性、無償性、利他性、先駆性が言われているにもかかわらず、ボランティアツーリズムないし孤児院ボランティアツアーはビジネスとしての利益やツーリストが利己的に求める「何かいいこと」を動機にしており、ボランティアの概念に矛盾しているという根本的な批判をまず挙げる。他に、孤児院ボランティアツアーによって集められた金銭の用途および金銭を集めるための演出の問題や、孤児院ボランティアツアーのために孤児院および孤児が倫理的に問題のある形で増えているといった孤児院という施設に関する矛盾や、孤児院ボランティアツアーが子ども (孤児) に直接的にもたらす2種類の悪影響、そして最後に、ツーリストの側の問題として動機の利己性や反省的な視点の欠如が挙げられている (薬師寺 2017a:65-71)。

2. 日本人大学生が参加する孤児院ボランティアツアーから見える問題点

薬師寺 (2017b) は、日本人大学生が多く参加する孤児院ボランティアツアーについてフィールドワークも含めた調査を行い、表2には含まれない問題点を指摘している。日本人のボランティアツーリストをめぐる課題として重要と考えられるため、ここで紹介する。

薬師寺 (2017b:199) は、「ボランティアツーリズムとは、ボランティアツーリストが不幸で困窮状態にあると認識する他者の状況を覗き見て、さらにその他者に援助を施すという行為を通して、自己の優越性や生、さらに存在意義 (他者から必要とされているという意味での意義) を再確認する行為である」と述べる。言い換えると、日本の大学生に孤児院ボランティアツアーが人気なのは、それに参加することで普段の生活の中では実感することができない自らの存在意義や自己成長、あるいは自分は充実した人生を送ることができているという感覚を獲得できるからだということになる。

薬師寺 (2017b:206) によれば、孤児院ボランティアツアーに実際に参加した日本人大学生の多くが、言葉も置かれている状況も大きく異なる孤児との間に交流を通じて絆を築くことができたといった趣旨のメッセージを残す。薬師寺 (2017b:204-205) が紹介しているメッセージとし

表2 孤児院ボランティアツアーに対する6つの批判

ボランティアの概念をめぐる矛盾	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアツーリズムはビジネスとして利益を追求する点でボランティアの原則の1つである無償性に反する ・孤児院という社会的弱者である子供を利用したビジネスであり倫理的に問題がある ・ボランティアツーリストが活動後に得る満足感や自己高揚感等は利己的なものであり、それらを求めてボランティア活動に従事することには矛盾がある
企画・運営者のモラルに対する批判	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアツーリズムを通じて集められた寄付金や手数料の使途が非常に不透明である ・より多くの寄付金を集めるために孤児院の運営者が孤児にみすばらしい格好をさせるなど貧困を演出している ・ボランティアツーリストの無償労働によって現地住民の雇用が奪われる
孤児院の増加に伴う親の安易な育児放棄や子育てに対する意識の低下	<ul style="list-style-type: none"> ・複数の開発途上国では孤児の数が減っているにもかかわらず、孤児院ボランティアツアーの人気の一因となって孤児院の数が増えている ・ボランティアツーリズムの人気による孤児院の増加に伴い、親が安易に子供を孤児院に預けるなど子育てに対する意識が低下している ・孤児院の孤児の中には親が健在であるにもかかわらずボランティアツーリズムのために人身売買のような形で集められた子供も多い
孤児に対する安全の脅威	<ul style="list-style-type: none"> ・孤児院ボランティアツアーは先進諸国における孤児院廃止の動きと矛盾する。多くの調査の結果、子供は施設(孤児院)に預けられるよりも家族やコミュニティの下で育つ方が長期的により良いことが明らかになっている ・先進国では当然とされる運営者の身元確認や資格取得が開発途上国では行われておらず支援の質の低下と孤児の安全の脅威につながる
孤児の感情形成に対する悪影響	<ul style="list-style-type: none"> ・孤児院ボランティアツアーとして一般的な短期間のボランティア活動ではコミュニティと融和できず有効な仕事は提供できない ・短期間でボランティアが入れ替わることによって子供は自分が見捨てられたと感じてしまい発育に悪影響を及ぼす
ツーリストの利己的動機に対する矛盾と言行動に対する批判	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアツーリストは自分探しや自己成長といった利己的な動機に基づき通過儀礼としてボランティアを行う ・ボランティアツーリストが基本的な労働を十分にできないのであればボランティア活動の本来の趣旨に反する ・ボランティアツーリストは自らに心地よい側面ばかりに注目し、ボランティアツーリズムの負の側面(軽率な言行動が孤児にもたらす悪影響や危険など)に無頓着・無自覚である

出典：薬師寺 (2017a:65-71) に基づき筆者作成

では例えば、「言葉は通じなくても、一緒に遊び楽しみ、気持ちは一つになりました。またいつか来ます。ありがとう!」、「元気いっぱい笑顔いっぱいの子どもたちと過ごした2日間はとても楽しかったです!これからステキな家族でね★」といったものがある。

しかし、孤児たちが大学生に対して積極的かつ交流的、ホスピタリティ精神に溢れた振る舞いを示すのは、ツーリストを満足させるためのホストすなわち孤児院の側の意識的な演出である。つまり、「不定期ではあるものの園長が監視し、ふさわしくない行動をとった子供がいたら、別室で叱責するという光景も見られた(薬師寺 2017b:204)」というのが実態であり、彼ら彼女らの日本人大学生への言動は極めて意識的なパフォーマンスなのである。そうした実情を知らない日本人大学生の側も、孤児院ボランティアという非日常的な場において普段とは異なる利他的・博愛的な振る舞いをし、理想的なボランティアを演じることで満足

感に浸る(薬師寺 2017b:206-207)。こうした双方の演出の結果、孤児院は運営資金を獲得し、また大学生たちは自己成長や自己充足の実感を得ていることになる。

このような事実を明らかにした上で薬師寺(2017b:207)が指摘するのは、孤児院ボランティアツーリストにとって何より大切なのは、自らが利他的・博愛的な振る舞いをすることで孤児から好反応が得られたという感覚であって、自分が交流や活動をすることで孤児の生活を実際に向上させることができたかではないという点である。貧困や孤児といった社会問題の解決が容易ではないことは論を俟たない。とはいえ、自らの活動が相手にもたらす最終的な結果や成果というものに無頓着な点は、およそボランティアを名乗る者として問題と言わざるを得ないだろう。

IV. 高校生向けの孤児院ボランティアツアーの検討

1. 高校生向けの孤児院ボランティアツアーの広がり

近年の日本におけるボランティアツーリズムの広がりを示す出来事として、H.I.S. と並ぶ大手催行業者である地球の歩き方 T&E が 2019 年にエキサイト T&E へと社名を変更した際、ブランド名を「地球の歩き方の旅」から「海外ボランティアの旅」に変えている事実がある。また、これまで日本においては大学生がボランティアツーリズムの主な参加者であったとされる中で（薬師寺 2017b:200）、「海外ボランティアの旅」のウェブサイトのトップページには、「海外ボランティア 国内もあり」「海外インターンシップ 自分を高めたい、就活対策に」「FOOTRAVEL ボールを持って世界の村へ」と並んで、「冬休みに社会貢献！ 高校生が参加できるボランティア」というバナー（具体的な内容を説明するウェブページへのリンクが貼られた画像）が置かれており、このバナーをクリックすると、「高校生の海外ボランティア・海外インターンシップ」というウェブページが開かれる。

「高校生の海外ボランティア・海外インターンシップ」でまず目に付くのは、「初めての海外体験としてボランティアを選ぶ高校生が増えていきます。『将来の留学の前準備』、『将来の夢、やりた

い仕事を考えたい』、『進むべき方向を見つけない』と参加理由は様々です。参加後は皆さんとても良い顔をして帰国されます。新しい自分に出会う旅に参加してみませんか？」という文章である。そして、2023 年 9 月 15 日の時点では「高校生にオススメのボランティア・スタディツアー」として、表 3 に概要を示した東南アジアを目的地とする 6 つのツアーが紹介されていた。6 つのツアーのうち 3 つが孤児院におけるボランティア活動をツアーの柱としており、それ以外に小学校の子どもを活動対象とするものが 1 つ、残りの 2 つは象の保護センターにおける手伝いと世界遺産の保存修復事業の見学を主な内容とする³。日数は 6～8 日、代金はおおよそ 20 万円前後である。

孤児院ボランティアツアーである 3 つの内容を見てみると、タイのツアーの場合、2 日目の午後から 6 日目の朝まで 4 泊 5 日で孤児院に宿泊・滞在することになる。遠足も含めた子どもとの交流に加えて、授業の手伝いや有機農園での作業、清掃活動なども行う予定である。ベトナムのツアーでは、3 日目の午前・午後と 4 日目の午前に孤児院を訪れる（宿泊場所はホーチミンのホテル）。4 日目の午前が遊園地または動物園への遠足で、3 日目の午前は施設の紹介と食事の調理、午後は自由交流に充てられている。

これら 2 つのツアーの場合、高校生限定かどうかで日数が異なるがボランティア活動に違いはない。一方、ミャンマーのツアーは高校生限定かど

表 3 「海外ボランティアへの旅」の「高校生にオススメのボランティア・スタディツアー」の概要

ツアー名 ¹	日数	代金(円) ²	ツアーに含まれるボランティア活動
カンボジア 村の小学校の子どもたちに体育を教える活動	7	178,000-218,000	農村の小学校における運動会の開催を手伝う
タイ 孤児院の子どもたちと遠足へ。笑顔と思い出を作る活動	6・8	192,000-209,000	孤児院における授業のサポートなどに加えて、遠足の引率を手伝う
タイ 象の保護センター支援と象使い体験	7	192,000-210,000	象の保護センターに滞在し、象の世話を手伝う
ベトナム ホーチミン「ツーズー病院」訪問と「子ども孤児院」交流 ³	6・7	184,000-204,000	孤児院の遠足の引率を手伝う
ミャンマー 孤児院で教育支援と保育ボランティア	6	178,000-198,000	孤児を受け入れている僧院において保育士を手伝う
上智大学 カンボジア遺跡保存・修復事業を学ぶ	7	218,000	アンコール・ワット保存修復事業を見学する

1. ツアー一覧のウェブページと各ツアー個別のウェブページとで表記にずれがある場合は筆者が適宜変更をしている
2. 高校生限定の日程がある場合はその代金も含む
3. ツアー一覧のウェブページではこのように書かれているが、個別のウェブページに書かれているツアー名は「ベトナムホーチミン『子ども孤児院』交流」でありツーズー病院の訪問は含まれていない

出典：「海外ボランティアの旅」ウェブサイト

うかでツアーの内容が変わる。対象を高校生に限定せず大学生や社会人も参加できるツアーの場合は、3日目の午前と4日目の午前に孤児院において未就学児を対象とする保育士の体験を行い、4日目の午後に子どもたちと自由な交流を行う。それに対して、高校生限定の場合は、3日目の午前に保育士体験を行うのは一緒だが、3日目の午後に行うのは小学校低学年の子どもたちが対象の英会話教育である。4日目の午前には保育士体験、午後には英会話教育があり、それらに加えて4日目の午前には給食を作ることになっている。参加者は子どもたちと一緒に給食（昼食）を食べることになるが、高校生限定ではないツアーに含まれていた「孤児院で暮らす子ども達と自由交流」（4日目午後）は行えないことになる。

現地滞在の半分以上を孤児院ボランティアに充てるタイのツアーは、これまでには見られないほどボランティアに多くの時間や労力を費やすものである。それに対して、ベトナムのツアーは表1の各ツアーに類似しており、活動内容も支援というよりも交流である。ミャンマーのツアーはベトナムと似ているが、高校生だけでは子どもたちとの自由な交流ができないという特徴がある。約10年前の調査結果（薬師寺 2017b）や「H.I.S. スタディツアー」のツアー（表1）と比べると、ボランティア活動の比重に関しては選択肢の幅が広がっていると言える。そして、高校生限定のツアーであっても大学生や社会人向けのものと同様の内容はほぼ変わらず、より多様な選択肢が高校生に用意されていることになる。

その一方で、前章で見たような孤児院ボランティアツアーの負の側面に関する情報提供や注意喚起は見られない。「海外ボランティアの旅」の「海外ボランティア Q&A」というコーナーには、「高校生が参加しても、活動の邪魔になりませんか？」という質問があるが、それへの答えは「『高校生参加 OK!』」のタグが付いているプログラムは、ボランティアやインターンシップが初めての方、高校生の方が参加できるように、現地にヒアリングした上で活動内容をアレンジしています。これまでも多くの高校生の方にご参加いただいているので、安心してご参加ください」というもので、イギリスのように「国外でボランティアをする前に自問自答すべき」何かがあるといった問題意識

はおよそ存在しない。

それと関係して、「高校生の海外ボランティア・海外インターンシップ」のウェブページで孤児院ボランティアツアーの「高校生の体験談」が2つ紹介されている時、それらに書かれているのは「子ども達の無邪気な笑顔や元気な姿に私自身もとても元気を貰いました」、「どの子ども達もハンディーキャップを持ちながらも自分の得意なことや才能を伸ばしている姿にとっても感銘を受けました」、「施設はとてものびのびとした雰囲気、外国人である私にも明るく話しかけてくれました」といった自分自身の肯定的な感情や経験ばかりであって、自分たちの活動によって相手が何を得たのかについての言及や思慮はない。

孤児院ボランティアツアーに参加した高校生のこうした感想には、「〈非日常的な世界〉〈異文化の世界〉への眼が開かれ」、「自分をよく見つけ、自分の生活をよく考えることができる（箱石 1996:28）」ようになったかのような記述が多い。だが、自らの活動の負の影響や否定的な側面への理解や配慮は読み取り難い。したがって、それは利他的なボランティアというよりも利己的なツーリストの立場に留まるものであり、薬師寺（2017b:199）が批判するように、孤児院ボランティアツアーを利用して「自己の優越性や生、さらに存在意義（他者から必要とされているという意味での意義）を再確認」しているに過ぎない。

2. ボランティアツーリズムの「研修」化

新型コロナウイルス感染症によって海外旅行が困難になる中では、オンラインのツアーが企画されるようになった。この動きは高校生向けのボランティアツーリズムにも見られるが、最近では高校生の利己的な動機により焦点が当てられるようになっている。

2003年に設立された一般社団法人ボランティアプラットフォーム、通称「ぼらぶら」は、「日本最大級のSDGs 総合プラットフォーム」を謳う国際協力NGOである。「ぼらぶら」の活動の柱は海外ボランティアとオンライン研修の2つであり、それらと連動する取り組みとしてワークショップや小論文コンテストなども行っている。

2023年9月15日の時点で海外ボランティアとしてウェブサイトですら紹介されているのは、

「【全部入り決定版！】カンボジア SDGs 海外ボランティア研修」である。「全部入り」とは、事前研修としての「オンライン SDGs 研修」、現地研修としての「渡航型海外ボランティア研修 + SDGs ワークショップ」、そして参加自由の事後研修である「SDGs 小論文コンテスト + 修了証書」の全てが含まれることを意味する⁴。このうち現地研修とは、カンボジアのシェムリアップ国際空港を集合・解散場所として夏休み・春休みの期間であれば5泊6日、それ以外の秋・冬の時期であれば3泊4日をかけて行われる。費用はいずれの時期でも139,800円（現地集合・開催のため航空券や海外旅行保険の費用は含まれない）、行程には世界遺産や博物館、小児病院、ソーシャルビジネスの現場の見学やマーケットの散策・買い物なども含まれる。ボランティア活動である「子どもたちへの日本語・英語授業ボランティア実践！」は、夏休み・春休みであれば4日目の午後、5日目の午前、5日目の午後の前半、秋・冬の時期であれば3日目の午後のみに行く。

現在の「カンボジア SDGs 海外ボランティア研修」の中には孤児院に関する内容は無い。しかし、海外ボランティアの「体験談」のウェブページを見てみると、「カンボジア SDGs 海外ボランティア研修」以外に少なくとも合計10の海外ボランティアやスタディツアー、研修、インターンシップなどが実施されてきたことが、また、個々の具体的な「体験談」を見ていくと、「カンボジア SDGs 海外ボランティア研修」だけでなく現在は募集が行われていない東南アジア方面の複数のボランティアツアー／スタディツアーにおいても、過去に孤児院でのボランティア活動が行われてきたことが分かる⁵。

「ぼらぶら」の高校生向けボランティアツアーは、第1に、実際に海外渡航をしないオンラインツアーが用意されている点で「H.I.S. スタディツアー」や「海外ボランティアの旅」と大きく異なる。しかも、一般的な「オンライン SDGs 海外ボランティア研修」に加えて、360度全方位を撮影できるカメラで撮った映像と仮想現実システムを用いることで、現地の情景をよりリアルに感じながら人びととライブで交流をする「未来型海外ボランティア」というツアーまで用意されている。そして、こうしたオンラインツアーを「海外ボラ

ンティア」ではなく「オンライン研修」という別カテゴリーに分類している点も特徴的である。

「ボランティア」でなく「研修」という名称を用いる意図は、「海外ボランティア」と「オンライン研修」の各ウェブページにおける説明とそれぞれの「参加者の声」で強調されている内容の違いから推察できる。つまり、「自分史上最高の学び体験で自分と世界の未来を切り開こう」あるいは「留学やSDGsなどいろいろな活動があるけれど、自分の将来のために、今本当に何をすべきかがわからない」といった形で、「海外ボランティア」に関しては「学び」や「将来」、「進路」といった観点からその意義が強調されている。ただし、その「参加者の声」である「体験談」の中でもっばら強調されるのは、「海外ボランティアの旅」の場合と同様の「学び」の側面である。

それに対して、「オンライン研修」に関しては「進路」への貢献が強調されている。すなわち、「オンライン SDGs 海外ボランティア研修」のウェブページでまず目に付くのは、「大学合格・企業内定ゾクゾク」という文句であり、その「参加者の声」は「推薦合格者・内定者体験談」という名称でまとめられている。そして、「推薦合格者・内定者体験談」のウェブページでは、「〇〇大学△△学部の総合型選抜／推薦選抜で活用！」といったタイトルの「参加者の声」が数多く紹介されている。その多くは具体的な大学・学部の名前や選抜形式まで明らかにした上で、書類作成や面接の際にいか「海外研修」の作成書類や経験談が役立ったかの具体的な説明に多くのスペースを割いている。なお、「海外ボランティア」の「体験談」で多く見られた「学び」の側面の説明もあるが、それらは自らの経験や将来に関する内容に留まっておき活動や交流の相手への言及はやはり乏しい。

そもそも「ぼらぶら」の各研修のウェブページでは、研修中に作成する書類は大学受験の際に提出する調査書の全ての項目に対応していることが強調されている。つまり、「ぼらぶら」のボランティアツールズあため「海外研修」は、「将来」以上により具体的で直近の「進路」への有用性を訴えることで高校生の参加者を集めようとしており、そこにおいて高校生にとっての気づきは、調査書の枠組みに上手く収まるように文章化される

ことがあらかじめ決まっている。そして、そうした利己的なあり方の下では、これまでに見てきた事例と同様に、自らの活動が海外の対象者にもたらす結果への考慮が欠落している。

V. おわりに：孤児院ボランティアツアーを通じた学習の可能性

近年、若年層を中心にボランティアツーリズムが世界的な広まりを見せており、特に人気の高い孤児院ボランティアツアーは、最近の日本ではオンライン形式のものが高校生に向けても売り出されるようになってきている。それに参加した高校生の文章からは、孤児院ボランティアツアーによって「〈非日常的な世界〉〈異文化の世界〉への眼が開かれ」、様々な気づきや学びを得て、自らの将来や進路といった形で「自分をよく見つめ、自分の生活をよく考える」ようになっていくことが窺える。この点で、孤児院ボランティアツアーは修学旅行に期待される教育効果を一定程度備えているようにも見える。

しかし、「研修」への名称変更が端的に示しているように、ツアーの中心に位置付けられているのはあくまでツーリストである学生にとっての個人的な有用性であって、ボランティアの原則の1つである利他性ではない。既存の孤児院ボランティアツアーのパッケージには、これまでに指摘されてきたような否定的な側面への理解や対応が乏しく、それは今日の高校教育の中でも公民教育において目指されている「他者を価値ある存在として尊重（文部科学省 2018a:17）」することや「他者と協働して課題を解決していくこと（文部科学省 2018b:1）」に反していると言わざるを得ない。

このような問題点があるものの、孤児院ボランティアツアーに多くの高校生を始めとする若年層が興味を持つことも事実である。そうであるならば、単に孤児院ボランティアツアーを否定的なものとして教育するのではなく、その是非も含めて興味を持った学生自身に探求させるのも1つの方法だろう。例えば吉田（2022:68）は、沖縄修学旅行における平和学習の多くが知識偏重かつ「戦争は二度と起こしてはならない」といった結論ありきの学習に陥っていると指摘する。そして、数日の学習で学生に沖縄戦・戦後沖縄の全体像を理解・把握させようとするのではなく、学生自身が

「問いを立てる」ことを中心とする探求学習の一環として修学旅行を位置付けることを、高校教育における「総合的な探求の時間」の目標にもより適合的な代案として提案する（吉田 2022:71-73）。こうした知見も踏まえて、より具体的な学習のあり方を検討・構想することが今後の課題である。

注

- 1 2017年5月に上記2社のウェブサイトを開覧した薬師寺（2016b:201）は、「海外（東南アジア）ボランティアツアー（一例）」として、タイ、カンボジア、ベトナム、フィリピン、インドネシアの東南アジア5か国を目的地とする合計20のボランティアツアーを紹介している。このうちツアー名に「孤児院」が含まれるものは6つ、「（小）学校」が含まれるものは4つ、「保育園」・「福祉施設」・「ストリートチルドレン」が含まれるものが各1つであり、こうした施設名も「子ども／チャイルド」という言葉も名前に含まれないツアーは5つであった（ただし、5つのうち1つは「シムリアップ 小さな美術スクール・交流活動」というツアー名なので、子どもを対象としていた可能性はある）。
- 2 孤児院ボランティアツアーでないものの名称は以下の通りである。「子どもたちの学び場を作るカンボジア6日間」「日本語学校の先生に！カンボジア・シムリアップ5日間」「日本語学校で子どもたちに特別授業！ウズベキスタン7日間」「スラムで暮らす子どもたちと交流 フィリピンセブ島5日間／ゴミ山・スラム街で交流ボランティア フィリピン・セブ島4日間」。
- 3 「上智大学 カンボジア遺跡保存・修復事業を学ぶ7日間」については「視察研修型のスタディーツアーです」との説明があり、活動内容も現場見学や講義に限られている。
- 4 事前研修としては、全12回の「オンラインSDGs 海外ボランティア研修」のうち指定された4回の講座の受講が必須であり、それを終えると「オンラインSDGs 海外ボランティア研修修了証書」が授与される。現地研修の内容は本文で説明する通りで、それを経験すると「カンボジアSDGs 海外ボランティア研修修了証書」が得られる。事後研修の「SDGs小論文コンテスト」とは、元国連事務次長補が特別審査委員を務め、年に2回開催される。

なお、「ぼらぶら」のウェブサイトでは過去に書かれた1,000以上の小論文が閲覧できる。

- 5 「ぼらぶら」の「体験談」のウェブページのサイドバーに記載されているツアーは以下の通りである。「カンボジア SDGs 海外ボランティア研修」、「カンボジア 教育ボランティア」、「インド ボランティア」、「カナダ 研修プログラム」、「オーストラリア ボランティア」、「バリ島 スタディツアー」、「フィリピン スタディツアー」、「ベトナム スタディツアー」、「インド スタディツアー」、「カンボジア 社会貢献ビジネスインターンシップ」、「ネパール UNV 活動報告」。また、孤児院ボランティアに言及している「カンボジア SDGs 海外ボランティア研修」の「体験談」として、「高校生最後の夏休み」というタイトルの文章がある。その中では、「孤児院で子供たちと触れ合ったこと、一生忘れません」、「孤児院での子供たちとの交流では、本当に多くのことを学びました。子供たちとの交流を通して、なにか私にできることはないかと将来について考え直すきっかけになりました」などと書かれている (<https://volunteer-platform.org/voice/cambodia2/19689/> 2023年9月15日閲覧)。

宮川えりか・小口孝司 (2020) 「海外修学旅行がもたらす心理的効果：高校生修学旅行者を対象とした縦断的質問紙調査から」、『日本国際観光学会論文集』、第27号、73-81頁。

文部科学省 (2018a) 『高等学校学習指導要領 (平成30年告示)』、文部科学省。

文部科学省 (2018b) 『高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説』、文部科学省。

文部科学省 (2022) 『高等教育を軸としたグローバル政策の方向性：コロナ禍で激減した学生交流の回復に向けて』、文部科学省。

葉師寺浩之 (2017a) 「孤児院ボランティアツーリズムをめぐる矛盾と批判：英国主要新聞社による報道内容からの考察」、『立命館文学』、第64号、59-77頁。

葉師寺浩之 (2017b) 「リアリティ充足手段としてのカンボジア孤児院ボランティアツアーにおける演出とパフォーマンス」、『観光学評論』、第5巻第2号、197-214頁。

吉田直子 (2022) 「沖縄修学旅行と総合的な探究の時間をつなぐ：『問いを立てる』ことから始まる探究学習としての沖縄平和学習の検討」、『法政大学教職課程年報』、第21巻、68-78頁。

参考文献

大橋昭一 (2012) 「ボランティア・ツーリズム論の現状と動向：ツーリズムの新しい動向の考察」、『観光学』、第6巻、9-20頁。

宍戸学 (2011) 「学習型観光の意義と教育観光としての現状と課題」、『日本観光研究学会全国大会論文集』、第26巻、339-344頁。

全国修学旅行研究協会 (2020) 『2019 (平成31・令和元) 年度全国公私立高等学校海外修学旅行・海外研修 (修学旅行外) 実施状況調査報告』、全国修学旅行研究会。

全国修学旅行研究協会 (2022) 『2021 (令和3) 年度コロナ禍と修学旅行：新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) が与えた修学旅行への影響 Vol. 2』、全国修学旅行協会。

箱石匡行 (1996) 「修学旅行と人間形成：社会科 (公民科) 教育の視点から」、『岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』、第6号、19-30頁。

ウェブサイト

一般社団法人ボランティアプラットフォーム「ぼらぶら」<https://volunteer-platform.org/> (2023年9月15日閲覧)。

エキサイト T&E 株式会社「海外ボランティアの旅」<https://volunteer.studyabroad.co.jp/> (2023年9月15日閲覧)。

株式会社エイチ・アイ・エス「H.I.S. スタディツアー」<https://eco.his-j.com/volunteer/> (2023年9月15日閲覧)。